

「ポストデジタル経済」へ、ビジネスや発想はこう変わる

アナログの逆襲

【立ち読み】

PART Ⅰ アナログな「モノ」の逆襲

第1章 レコードの逆襲 24

レコード復活の最前線／なぜ復活したのか／コミュニティとつながる／
売上以上の経済価値／自然発生的な即興を起こす

第2章 紙の逆襲 64

モレスキン人気の秘密／エモーショナルな力／自由と創造性／
無形価値と伝統の強み／紙の力／デジタルとのコラボ

第3章 フィルムの逆襲 96

フィルム業界の終焉の後で／躍進への道／ロモグラフィーの黄金律／
眠れる巨人を起こす／偶然性と意外性／大物監督たちも続々支持

第4章 ボードゲームの逆襲 132

社会と交わりたい／第三の場所／身体が出す無数の合図／ゲームのソムリエ／
起業家たちが次々と参入／孤独な世代／年代や性別を超えてにぎわう

PART Ⅱ アナログな「発想」の逆襲

第5章 プリントの逆襲 172

デジタル出版の問題／印刷出版物は利益を生む／読者という価値／
高級アイテムとして／新聞の変革／ニッチ出版物の隆盛

第6章 リアル店舗の逆襲 203

書店が増え始めた／変わる小売店／実店舗の強み／
オンライン小売店が赤字なわけ／なぜデジタル・ブランドに実店舗が必要なのか／
電子書籍リーダーの売上停滞／都市の文化と環境を作る

第7章 仕事の逆襲 241

メイド・イン・デトロイトの腕時計／創造的破壊はなにをもたらしたか／
熟練の解体を防ぐ／雇用を創出できないデジタル経済／
「職人たちの物語」を売る／コミュニティに有益な投資を

第8章 教育の逆襲 276

教育の未来とデジタル・テクノロジー／ハイプ・サイクル／大きな過ち／
情報の残存性／共感玩具／統合思考・デザイン思考／情報を知識にする

第9章 デジタルの先端にあるアナログ 318

デジタル業界ほどアナログを重視／精神のリセット／
職場をアナログな環境に／フェイスブックの「アナログ・リサーチ・ラボ」／
「摩擦」が創造性を刺激する／グーグルのデザインは紙とインクのスケッチから／
デジタルの限界／最後の五パーセントの体験

おわりに 夏の逆襲 356

はじめに ポストデジタル経済へ

アナログの逆襲

二〇一二年六月、ジューン・レコーズという店がトロントのリトル・イタリー地区に開店した。私が妻と買ったばかりの家からほんの一ブロック半のところだ。ジューン・レコーズは、少年時代から通っていた埃っぽくて雑然としたレコード店とはまるで違った。モダンで、商品はきれいに整理され、明るい照明が店内を煌々と照らしていた。ブティックと言ってもいいくらいだ。家の購入契約を交わした後、近所を散策していた私は、この店の前の歩道で、窓際のターンテーブル（レコードを回して鳴らすプレーヤー）から流れてくる美しいサウンドに思わず足を止めた。アレサ・フランクリンのアルバム『ライブ・アット・フィルモア・ウエスト』だった。ソウルの女王と、これから住む地区に降り注ぐ夏の陽射しは実に魅力的な取り合わせで、素通りなんてできなかった。私は店に入り、レコードの値段を訊くと、アレサを小脇に抱え、うきうきと踊るような足どりで店を後にした。

音楽が好きな人たちがほとんどそうであるように、この十年間、私の音楽コレクションからは形のあるモノが少しずつ減っていた。最初はCDをパソコンのiTunesに取りこみ、次にiTunes

からiPhoneに転送し、しまいはすべてのコレクションをクラウドに保存するようになったからだ。ターンテーブルはまだ持っていた。友人のデイヴィッド・レヴィーからもらった古いテクニクス（オーディオブランド）だ。けれども、もう二年以上も実家のダンボール箱に入ったまま、すっかりほったらかしになっていた。そのあいだ、私はどんな音楽にも、ジューン・レコーズのあの一枚に払った二〇ドルより多い額を使ったことはなかった。

その秋、新しい家に入居すると、さつそくターンテーブルをセットして、ついに全盛期の素晴らしいアレサの歌声を拝聴できた。一曲目の「リスペクト」が流れ出してすぐに、録音された音楽を自分で選んで聴くのはずいぶん久しぶりだと気がついた。パソコンのiTunesを開いたのは何カ月も前のことだし、iPhoneにもう曲は入れていなかった。かつて聴いていたアルバムはすべてハードディスクにしまいこまれ、古いEメールと雑多なファイルに埋もれて、思い出すこともなくなっていた。ほぼ毎日、私が聴くのはキッチンと車で流れる公共ラジオだけだった。兄が私のために音楽ストリーミング・サービス「オールディオ」を定期購入してくれたときは、アプリを開いても何を選曲したらいいかわからず、途方に暮れてしまうことがよくあった。なにしろ、選択肢が無限にあるのだ。過去に録音されたありとあらゆるアルバムと歌が選べるのだから。自分が何を聴きたいのかわからない。まるでデジタル音楽の手軽さと便利さが、音楽を聴く楽しみを吸い取ってしまったようだった。クリックひとつで夥しい数の音楽が手に入るのに、それさえもできなかった。あと数回タップすれば、もつとよい曲が見つかるかもしれない。そう思ってしまうからだ。何かが足りなかった。それ

を取り戻す方法がようやくわかった。レコードだ。

気がつくとも、私は暇さえあればレコードを買っていた。はじめのうちはジューン・レコーズの安売りコーナーで昔のジャズやソウル・アルバムを漁っていたが、すぐに店のスタッフから教えてもらったバンドやアーティストの新作を購入するようになった。店内のターンテーブルでかかっている曲があれば、それもよく買い求めた。たとえば、地元のバンド、オールウェイズの調和のとれたギターロックのデビューアルバムや、サイケなディスコを奏でたナイジェリア人の隠遁者、ウィリアム・オニバーの新しいコンピレーション・アルバム、ラップの伝説ゴーストフェイス・キラとファンク・バンドのバッドバッドノットグッドの楽器のみのヒップホップ・コラボレーション——。越してきたときは一二、三枚だった私の新しいコレクションは瞬く間に膨れ上がり、とうとう妻から、これ以上レコードの棚を増やさないようにと言われ渡された。

ところが私は新しい楽しみにすっかり夢中で、妻の通告など気にもとめなかった。このさきやかなレコード熱が、初めてナップスターをダウンロードして以来、私の胸の奥に眠っていたものを呼び覚ましたのだ。それは、店で実際にアルバムを見て回って購入するという「モノに触れる喜び」だ。レコード店の前を通りかかると、きまって財布のなかの一〇ドル札が急にチリチリと熱を帯びて、使ってくれとせがみはじめた。そんなときは、三〇分もするとアルバムを脇に抱えて店から出てきたものだった。意気揚々と、まるで「こいつを録音したのはおれなんだ」と言わんばかりの顔をして。いまの時代、それと同じ曲がネットで無料で手に入り、再現するデバイスは五つもある。それなのに私と

きたら、プラスチックを溶かして作った、傷がつきやすい重くてかさばる円盤に結構な額を注ぎこんでいた。おまけに、その円盤を再生するのは、くたびれた車みたいにお金も神経も使う装置ときている。まったくおかしな話だった。

けれども、おかしいのは私だけじゃなかった。街を歩くと、数カ月ごとに新しいレコード店を見かけた。新規オープンした店や、急に事業を拡大した既存店の二号店や三号店だ。新しい店が現れるたびに、小さな奇跡が起きたように見えた。なにしろ一〇年前は、レコード店はなくなると誰もが信じていたのだから。実際のところ、デジタル時代に適応できずに消えていく小売ビジネスの象徴として、しばしば引き合いに出されていた（「書店はウェブに活路を見出さなければ、レコード店と同じ運命をたどりかねない」など）。当然のことながら、新しい店をオープンする者などいなかった。

そんな小売業界の恐竜が、絶滅の危機を脱したばかりか、いまは街中を歩き回り、世界中で繁殖しているようだった。レコード店の消滅を書き立てる記事は、思いがけない展開とジューン・レコーズなどの新規開店のニュースに取って代わり、しまいにレコード店が復活しただけでなく、大繁盛であると高らかに宣言した。新たにプレスされ販売されるレコードの数は、この一〇年間で一〇倍以上に跳ね上がった。その結果、ターンテーブルの売上と、新規レコード店も急増した。ジューン・レコーズの共同オーナー、イアン・チャンによれば、開店以来、同店の売上は毎月約五パーセント、収益にいたっては毎年ほぼ倍の勢いで伸びているという。先月は、わずか数ブロック先に別のレコード店がオープンした。しかし、チャンは競合を気にしていない。店が増えれば増えるほど、ジューン・

レコードに需要がある証になるからだ。

売上よりもっと重要な変化が、客層だ。同店の店員の長髪でレコードに一言ある（要は、典型的なレコード店のグルの存在）アンドリュー・ブーカーマンによれば、過去一〇年、レコード店を訪れるのは、「全品一ドルの箱で掘り出し物を漁る小汚い年寄り」と相場が決まっていたという。みなさんもご存じだろう。薄くなった頭の後ろで白髪混じりの髪をポニーテールに結び、ジェーンズ・アディクションのくたびれたライブTシャツの裾を、あちこちに継ぎを当てた黒いジーンズにたくしこんだ男たち——自分たちの世代の文化がいかに素晴らしいかを延々と独りごちる、あのタイプだ。

ところが、開店してほどなく、そんな光景が一変した。小汚い輩に若者が取って代わったのだ。店内は、音楽好きの二十代と十代、デジタル音楽で育ち、アップルのデバイスで無料のヴァーチャル・ファイルでしか音楽を聴いたことがない客でいっぱいになった。さらに驚いたことに、もうひとつの客層が出現した。

「女の子だよ！」とチャンは言った。その顔には、砂漠をさまよい続け、突然水辺にたどりついた男のような大きな安堵の表情が浮かんでいた。「女の子たちがまたレコードを買いはじめたら、風向きが一変したっていう証拠なんだ」と、ブーカーマンもうなずいた。「女の子が店にくるようになると、あの老人たちの眼が変わったよ」。そこには恐怖の色があつたという。女性客が戻ってきたうえに、増え続けているという現象は、レコード店がカルチャーシーンの定位置、つまり、音楽と仲間を求めて若者たちが集まるクールな場所に復帰したことを示していた。

トロントだけでなく、世界中でレコードが復活していた。メディアから音楽業界にいたるまで、みながこの予期せぬ出来事を説明しようと躍起になった。オーセンティシティ（本物であること）、ノスタルジー、ミレニアル……お馴染みのマーケティング業界の流行語がさまざまな組み合わせで登場した。厄介なヒップスター——二〇〇〇年代初めの若者文化を代表する悪名高い種族。下層住宅地の再開発による中産階級化（家賃が上がり既存住民が立ち退かざるをえなくなった）からびつちりしたジーンズまで、いまま都市部の悩みの種はすべて彼らのせいになされている——のしわざにする者たちもいた。

しかし私は、レコードの復活はもつと大きな現象の一部だと考えている。それは、「アナログの逆襲」だ。

デジタルにはない価値

ジューン・レコードが開店する五年前、私はユタ州パークシティで、あるユダヤ人組織の「リブート」というリトリート（日常生活を離れ、自分と向き合う時間や新しい体験をすること）に参加した。その週末は、ユダヤ人のアイデンティティと文化を見直すさまざまな活動がおこなわれ、出席者は全員、安息日——金曜日の日暮れから土曜日の日暮れまでの二四時間の休息期間——にテクノロジーを断つことを求められた。そのときの経験でテクノロジを使わないと元気が回復すると気づいた私は、敬虔なユダヤ教徒ではまっぴらになかったにもかかわらず、トロントに戻ると定期的に自分だけのデジタル

安息日を設けはじめた。

それから数週間後、私と恋人（現妻）は、友人宅の金曜日の夕食会に招かれた。テーブルを囲んだ八人のうち、なんと妻と私を除く全員が、スマートフォンを手放さず、前菜でも、メインでも、デザートでも、メッセージを打ちこむのに夢中だった。私たちは口もきけないほど驚いて、誰かが会話を黙殺して——眼の前の皿のチキンが冷めていくのもお構いなしに——小さなキーボードに没頭するたびに、テーブルの下で互いの足をつき合った。このときはじめて、テクノロジが人間の社会的なふるまいを根本から変えてしまったのを目の当たりにし、大きな衝撃を受けた。

もちろん、私たちが目にしたのは、おぼろげに姿を現しはじめた巨大な氷山のごく一部にすぎなかった。その晩から数カ月もたたずに初代 iPhone が発売され、無限に見えるその能力が世界中を虜にする。妻と私も、ほどなくしてほかのカップルと同じになる。夕食のテーブルで、周囲の世界も、お互いさえ目に入らずに、iPhone のスクリーンに顔を埋めるようになったのだ。

その晩遅く、アパートメントに戻った私は、親友のアダム・キャプランに友人宅での気づまりな夕食の話をした。最初はたわいのない雑談だったが、気がつくやうにデジタル・テクノロジが人間の生活に与える影響についてすっかり話しこんでいた。教師であり、現代テクノロジにも精通するアダムは、デジタル・テクノロジが社会を変革できると強く信じていた。その一方で、デジタルの恩恵が犠牲なしに享受できないことも率直に認めていた。

アパートメントには、アダムが実家から持ちこんだばかりのターンテーブルと、彼の両親のレコー

ド・コレクションの大部分（ハーブ・アルパートとザ・ティファナ・ブラス全集など）が置いてあった。それらのレコードが、本書を書くきっかけとなる重要なおしゃべりのバックミュージックだけでなく、議論を盛り上げるきっかけにもなった。

レコードで音楽を聴く経験は、効率が悪く、手間がかかるうえに、音質も同じステレオで再生されるデジタル・ファイルよりいいとは限らなかった。けれども、ハードディスク・ドライブで聴くよりも夢中になれて、結果として聴きごたえがあるように思われた。私とアダムは、棚に並んだアルバム の背表紙を見ながら曲を選び、ジャケットのデザインをじっくりと吟味した。それからレコードをターンテーブルに置いて、そろそろと注意深く針を落とした。針がビニールの表面に触れ、一秒間の静寂ののち、最初のチリチリという音の波がスピーカーから聞こえてくる。どれもハードディスク・ドライブで再生するより身体を使う行為であり、手、足、目、耳だけでなく、レコードの表面の埃を吹くために口も必要とした。レコードをかけるという経験には、数値では測れない豊かさがあつた。効率が悪いからこそ、楽しみも大きかったのだ。

これはアナログならではの醍醐味だな、とアダムは言った。広義の（そして、本書の基盤となる）アナログは、デジタルの対極にある。デジタルはコンピュータ用語であり、0と1の二進コードだ。その組み合わせを延々とつなげることで、コンピュータのハードウェアとソフトウェアは通信や計算が可能になる。インターネットに接続されたり、ソフトウェアを使って実行されたり、コンピュータにアクセスされているものは、すべてデジタルだ。そんなデジタルを陽とすればアナロ

グは陰、昼に対する夜のようなものだ。アナログにコンピューターは不要であり、ほとんどの場合、(「バーチャル世界」の対語として)「現実世界」に存在するからだ。

このような視点で世界を見ると、ある変化が起きていることに気がついた。デジタル化がますます進む近年、「時代遅れ」と揶揄されていた技術やプロセスが、唐突に息を吹き返しはじめていた。街を歩くと、コンピューターとは無縁のアナログ製品の新しい専門店を毎週のように見かけた。たとえば、凸版印刷のカードや招待状、フィルム写真、ハンドメイドの革製品や時計、雑誌の創刊号、万年筆、それにもちろんレコードも。私たちのアパートメントのすぐ近くにはボードゲーム(盤上でおこなうゲーム)・カフェが開店し、初日から客の行列が外まであふれるほどの盛況ぶりだ。

私は人生のほとんどをライターとして過ごしてきたが、スタートアップにいくらか投資もしている。しかし、目の前で展開しているトレンドは、現代経済のイノベーションの一般論に逆行している。誰もが次の画期的なアプリの開発に熱中しているはずなのに、私の周囲で流行っている新ビジネスはまったく違った。それは形のあるモノを売る、壁と窓のある場所だった。

衰退する運命にあったアナログの需要が再び高まっているかのようだった。アナログの逆襲は、デジタルが浸透した時代に、デジタルではない製品、サービス、アイデアの価値が再び上がり、見直されていることを示していた。さらに、デジタル・テクノロジーの役割が拡大する一方で、それに代わる「ポストデジタル経済」も生まれつつあるようだった。最初は流行に敏感な都市部だけのトレンドと思っていたが、たちまち消費者文化の主流へと拡大した。ぼたぼたと垂れる滴のようだったアナロ

グの逆襲は、あつという間に激流に変わり、私の周囲を呑みこんだ。

あるテクノロジー企業の創設者に郊外のスターバックスで会ったとき、彼はモレスキン(イタリアの手帳&ノート・ブランド)の手帳にメモをとっていた。彼だけでなく、店内のほかの多くの客たちも同じだった。衣料チェーン店のアーバン・アウトフィッターが、突然店頭でポラロイド・フィルム・カメラを大量に並べたかと思うと、オーガニック食品を扱うホールフーズ・マーケットがレコードを販売すると発表した。連日のように新しいアナログのトレンドを取り上げるニュースが流れ、ネットを遮断して「いま、この瞬間」の自分の体験に意識を集中させるシリコンバレーの瞑想コースや、テクノロジーを排除した豪勢な企業主催のリトリートが急増していた。デジタルによる注意散漫の危険や、直接顔を合わせるやりとりのメリットを説く本がベストセラーになり、一〇年前に夕食会で私を無視した友人たちは、食事中はもうスマートフォンをかばんにしまって触れもしない。学者たちは、現実世界でのコミュニケーション、スクリーンを使わないふれあい育児、紙の媒体の読書を奨励する研究結果を次々と発表し、アマゾンにいたってはシアトルに実店舗書店までオープンした。ほかのオンライン小売店もそれに続き、かつて打倒を誓った実在する店舗を続々と建てはじめた。そうこうするうちにカセットテープまで再登場とあいなって、あれよあれよという間に「アナログ」はバズワードに昇格した。

なぜこんなことになったのだろう? ウェス・アンダーソン(『グランド・ブダペスト・ホテル』や『犬ヶ島』の映画監督)が監督する、手作りのかわいらしいものを散りばめた翔んでる夢に迷いこんでし

まったのか？ 単に私がアナログに魅了されたから、こういうことが目につくのか？ それとも、この現象を裏で牽引しているものがあるのだろうか？ 人間の根源に訴える何かによって、デジタルとの恋愛関係が転換期を迎え、私の人生を定義していたデジタルの驚異的で避けられない進歩から一気に離反しはじめたということなのか？ デジタル化の一途をたどる世界で、なぜアナログが逆襲しているのだろうか？

欠点が強みに変わる

周囲を見回せば、毎日のように何かがデジタル・テクノロジーによって強化され、改造され、刷新されている。車も、家も、仕事も、性生活まで。テクノロジーがそつなく整然と進歩をとげていくなかで、古いテクノロジーは絶えず新しいテクノロジーによってお払い箱にされている。音楽を聴く方法も、生演奏から蠟管へ、レコード、カセットテープ、CD、MP3のダウンロードを経て、ワイヤレスのストリーミング・サービスへと進化した。将来は、もつと質の高い音楽を、より安く、速く、手軽に、一〇〇パーセント、バーチャルで楽しめるようになるだろう。私たちの生活の多くのものがそうなってきたように。

つい最近まで、デジタル化できるものがあるのか、その運命は目に見えていた。たとえば、雑誌はオンライン版のみになり、買い物はすべてウェブですませ、教室はバーチャル方式になる、というように。コンピュータに取って代わられた仕事はもう数えきれない。これからも、世界はひと

プログラムずつ、ビットやバイトに変換され続けるのだろう——デジタル・ユートピアが訪れるか、ターミネーターが襲来するまで。

けれども、アナログの逆襲は違う筋書きを示している。ここでは、テクノロジーのイノベーション・プロセスは、よいものからよりよいもの、最高のものへと徐々に進化する過程ではない。私たちが何者で、どのように生きるかを知るための試行錯誤の道のりなのだ。

アナログの逆襲は、デジタル・テクノロジーが並はずれて進歩した結果にほかならない。デジタル計算は約五〇年前に日常生活の一部になった。三〇年前にはパソコン、二〇年前にはインターネット、一〇年前にはスマートフォンが後に続いた。そして現在、デジタル・テクノロジーは日常にあまねく浸透し、もつとも効率的でお金のかからない一般ツールとして、当たり前になっていく。ほんの数回タップするだけで、クラウドに膨大なデータの個人倉庫^{ストレージ}を設置するのと同じくらい簡単に、焼き立てのクッキーを宅配してもらうことができるのだ。

この圧倒的な能力により、新しいデジタル・テクノロジーが出現するたびに、アナログはほとんど無用の長物となり、価値が急落する。けれども、その認識は時間とともに変化する。特定のデジタル・テクノロジーとの蜜月はいつか否応なく終わりを告げ、真の利点と欠点をより公正に判断できるようになるからだ。多くの場合、古いアナログのツールや手法を使うほうがうまくいくと判明する。その結果、人はアナログ特有の効率の悪さを強く求めるようになる。アナログの欠点が新たな強みに変わるといふわけだ。

これが、アナログの逆襲がなぜ重要なのか、そして、本書で取り上げるアナログな製品と発想の台頭がほんのほじまりにすぎないという理由である。デジタルに囲まれる現代生活で、私たちはもつとモノに触れる経験、人間が主体となる経験を渴望している。商品やサービスに直に触れたいと望み、多くの人がそのためなら余分な出費もいとわない。たとえ同じことをデジタルでするよりも、手間がかかって高額でも。

アナログの逆襲は、デジタルが不可欠だという前提だけでなく、デジタル経済そのものの絶対性にも異議を唱えている。この流れは強力で、容易には逆えない。シリコンバレーやほかのスタートアップ拠点が掲げる破壊礼賛のテクノ・ユートピアニズムに逆行するような現象だが、実のところ、テクノロジーの進歩が絶対ではない、という証にすぎない。新しいソリューションは最初こそ積極的に取り入れられるが、長期的に見れば、真によりよい経験をもたらしてくれなければ持続しない。そのソリューションが実際にデジタル・テクノロジーと張り合えなければ消えていくのだ。

この点で、現在起きている現象はさらに重要と言える。アナログは、現実世界の喜びとデジタルでは得られない恩恵をもたらす貴重な経験だが、単純にソリューションとしてデジタルよりすぐれている場合もあるからだ。たとえばペンは、いまもキーボードやタッチスクリーンよりアイデアを広げやすいツールだ。さらに、後述するように、アナログ・テクノロジーの不便さは、生産性を妨げるどころか、高めることができる。

ここではつきりさせておきたいのだが、本書はデジタル・テクノロジーへの反対を書き連ねた本で

はない。各章で紹介する個人、企業、組織は、ノスタルジックな感傷からデジタル出現前の美化された時代を安易に再現しようとしているわけではない。本書にラッダイト〔技術革新反対者〕は登場しない。登場するのは、鋭い先見の明を持ち、革新的で、あらゆるデジタル・ツール——オンライン・クラウドファンディング、ソーシャルメディア、設計ソフトウェア、スマートフォンなど——を駆使しながら、アナログ製品やサービスを市場に出している例ばかりだ。デジタル世界を押しやるのではなく、むしろアナログ世界を近づけて、その利点をフルに活用して成功している。

したがって、アナログの裏にある普遍的な真理を活用する企業や機関にとって、世界を席卷するこの現象は途方もないチャンスである。アナログの需要に応えることは、利益だけでなく、もつと大切な教訓ももたらしてくれる。それは、世界とどう関わるか、そして、どんなテクノロジーを選ぶかによってその関わり方が変わってくるということだ。あなたやあなたの組織がポストデジタル経済を生き、成功を収めようとするならば、レコードを聴いたり、ボードゲームをしたり、デトロイトで腕時計を作ったりしなくても、これらのビジネスの成功例の教訓が役立つことは間違いない。

本書では、アナログの逆襲がどのように起きているかを二部に分けて探求している。

第Ⅰ部の「アナログなモノ」の逆襲」では、レコード、紙製品、フィルム、ボードゲームという新市場を考察し、時代に合わなくなったと言われたアナログ製品の製造・販売企業が、消費者の根本的な欲求を引き出して成功している例を紹介する。

第Ⅱ部の「アナログな発想」の逆襲」では、出版、小売り、製造、教育業界、シリコンバレーの

教訓をもとに、デジタル重視の経済のなかでアナログな発想が持つ革新的かつ破壊的な可能性とその恩恵を実証する。

重要なのは、デジタルかアナログのどちらかを選ぶことではない。私たちはデジタルの使用を通して、このように物事を極度に単純化する考え方に慣れてしまった。つまり、一かゼロか、黒か白か、サムスンかアップルか、という誤った二者択一だ。現実世界は、黒か白ではなく、グレーでしかない。色とりどりで、触れたときの感覚に同じものはひとつもない。そこに、豊かな感情が幾重にも折り重なっている。そのなかで人間は、思ってもみない匂いに驚いたり、奇妙な味に顔をしかめながら、完全ではないことを大いに楽しんでいる。最高のアイデアはこの複雑さから紡ぎ出されるが、デジタル・テクノロジーにはまだそれを十分に再現する能力がない。いま、この現実世界がかつてなく重要になっている。

アナログの逆襲はこのごちゃまぜの現実のなせる業だ。デジタル・テクノロジーの挑戦を受けながらも、そこから力を引き出している。テクノロジーにはひとつひとつ役割があり、生み出す結果もさまざまだ。アナログの逆襲から見えてくるのは、過去と共存しながらテクノロジーの未来を築く新しいポストデジタル経済である。

本文に入る前に、親愛なる読者のみなさんにお願ひがある。本書はコンピュータを使って書かれ、電子機器で読まれているかもしれないが、本であることに変わりはない。だから、アナログ的な環境で読むことでもっとも趣旨がよく伝わると思う。どうか携帯電話の電源を切ってほしい。デジタ

ル機器をできるだけ締め出して、ページをめくりながら、静寂を味わってもらいたい。くつろげる場所にゆつたりと腰をおろし、もしターンテーブルを持っていたら、スイッチを入れてみよう。これからみなさんを、私が経験したアナログの逆襲の旅へお連れする。最初に案内するのはレコードだ。まずは世界的なレコード・ブームの中心地を訪れよう。

いま、さまざまな分野でアナログの魅力が再注目され、ヒットしている。たとえば、音楽でもCDの売上は落ち込む一方なのに、アナログ・レコードは世界的に人気が高まっており、売上も大きく伸びている。こうした現象が興味深いのは、アナログ人気がけつして過去を振り返るノスタルジーではないことだ。今日のアナログ・ブームを牽引しているのは、幼い頃からデジタル環境になじんできた若い世代である。また、デジタルの最先端にあるGAF(A「グーグル、アップル、フェイスブック、アマゾン」)などの企業も、アナログ的発想を重視しはじめている。そう、いま台頭している現象は、「デジタルの先にあるアナログ」であり、「ポストデジタル経済」へ向かう大きな潮流なのだ。

本書は、第一部「アナログなモノ」の逆襲」で、レコード、紙、フィルム、ボードゲームの人気を通して、こうしたアナログ・ブームの実態と背景を探る。さらに、第二部「アナログな“発想”の逆襲」では、印刷メディア、リアル店舗、仕事、教育、デジタル先端企業などの取材により、アナログの隠れた力が明かされる。

アナログならではの魅力を本書は多面的に考察するが、とくに強調されるのは次のポイントだ。まず、「フィジカル・身体的」であること。これはモノとしての存在感だけではなく、身体を介した認

知・コミュニケーションが含まれる。たとえば、ボードゲーム(テーブルゲーム)の面白さは、デジタルのゲームでは味わえない人間的なやりとりが得られることにもある。対戦相手の表情、姿勢、息づかい、飲み物をすすめる様子、テーブルの下での貧乏ゆすりまで、身体が出す無数のシグナルから、複雑な感情を読み取ってゲームを進める。交渉、はったり、嘘、ごまかしも戦術のうち。そこには高度な感情的知能や直感が欠かせない。チェスや囲碁が得意なAIでも及ばない領域なのだ。

私たち人間は、幼児期に「触れ、嗅ぎ、聴き、見て、味わう……」といった五感を通して世界を学んでいく。こうした行為が、社会的・感情的・認知的な発達の基盤となる。また、身体を使う遊びによって、他者との関わりや社会のルールも身につけていく。まさにアナログが人間としての原点をなすわけだ。スマホやネットによるコミュニケーションが発達したからこそ、それだけでは満たされないリアルで社会的な体験・交流への欲求も高まってきていると言える。

アナログはその制約を強みに変えて、「創造性・即興性」を触発する。グーグルではデザインを紙とインクを使った手描きのスケッチから始めるようにしている。最初にデザインソフトを使うと細かいことに気を取られ、アイデアを自由に羽ばたかせることができないからだ。モレスキンのノートが創造性を重視する人々に愛されるのも、同様の理由だろう。手描きのメモは、デジタル機器に書くよりも、集中力を高め、情報を保持し、精神衛生にもよいことが判明している。このことは、音楽業界のアナログ的な録音にも言える。デジタル的な録音技術が進むと、幾らでもやり直しができ、修正可

能だ。その代わり、音楽本来の持つ生々しさ、エモーショナルな即興性が削ぎ落とされてしまう。一流のミュージシャンがアナログ録音に改めて注目しているのは、彼らの創造性・エネルギーを盛り上げる熱い芯がそこにあるからだ。リアルな買い物にも、こうした刺激が潜んでいる。ネットショップの「おすすめ」は関連性のある商品が主体だが、リアルな買い物には予想もつかない出会いがあるからだ。ぶらぶらと店内を歩いていて、思いがけず素敵な本や服などに巡り会う喜び。こうした「セレンディピティ（偶然の素晴らしい発見）」体験も、実店舗ならではのだろう。

教育や職場でも、アナログが重視されつつある。今日の教育に欠かせない「二十一世紀のスキル」、創造性、コラボレーション、批判的思考、コミュニケーション、共感といった能力は、デジタルよりもアナログ的なツールや方法のほうが遙かに養える。職場においても、従業員が顔を合わせて会話をしたり、協働を促すような場づくりが進められている。デジタル企業がアナログ的な遊び心あふれる環境や、素材を生かした空間デザインなどにこだわっているのも、そのほうが「生産性」が高まるからにほかならない。

ネット通販の猛威に曝されている小売りにおいても、アナログはけっして絶滅した恐竜のようではなかった。ネット通販が占めるシェアは拡大傾向にあるとはいえ、米国ですら一〇パーセントほどに過ぎない。しかも、多くのオンライン小売り事業はまだまだ赤字経営なのだ。一方で実店舗は、顧客獲得、買い物経験、販売促進、リピート率・顧客単価などにおいて、ネットショップよりも有利だ。

また、書店の手売り（店員が顧客の読みたい本を対話しながら選ぶ）のように、たんなる小売店と消費者という関係を超えた「親密な交流」を促せるのも、実店舗の強みだろう。「ブランド価値」を高める上でも、実店舗が優れていることは、アップルの成功を見てもうなずける。メディアにおいても紙媒体は部数が減つても、読者の「エンゲージメント（愛着のある絆）」が高く、収益面で健闘している。インディペンデント系の雑誌も続々発刊され、毎号一〇万部以上を売り上げるものもある。

アナログな業態は、「雇用」面でも欠かせない。デジタル企業は、少人数で動かせるため、ごく一部のエリートしか従事できない。また、分野のトップ企業だけが生き残れる寡占支配の世界だ。こうしてデジタル経済は、格差や不平等を広げていく。一方で、アナログを残す製造業などの企業群は、互いに競争し合いながら、多くの雇用機会をもたらしている。「地域コミュニティの活性化」につながるポテンシャルもあり、そこにポストデジタル経済の果たすべき大きな役割がある。

デジタルはめまぐるしく進展し、更新されるため、「レガシー（後世へ残る業績・伝統）」を育みにくい。対照的に、リアルなモノや空間には、時間の蓄積や希少性があり、プレミアムな価値をもたらす。中古になっても、かえて高く売れるレコードのように。そして、アナログには味のある「物語」が寄り添う——穏やかな声で「人間らしさ」とは何かを問いかけるような物語が。「テクノロジ」のイノベーション・プロセスは、よいものからよりよいもの、最高のものへと徐々に進化する過程ではない。私たちが何者で、どのように生きるかを知るための試行錯誤の道のりなのだ」